

13
遠
1807
96

正
史
傳

いろは文庫卷之三十六

江戸

爲永春

第七十一回

川を見えまうと斜垣茶屋の二階ふざめく客へ云々、
ヤシヤク小籠の松そり仰時も皆くねあくひぬゑあひ
ゆの一寸一聲欣きハジメラヤ又私であくまきくこつも
ひとづかみ元を犯えが爲くいぢアあります
イヤくひ身ヒツキ今リあもくとあく汝カ小手シナ小糸スレの

金であるもを子一毛ふ永えひく欣あくつてある
まの子アサア「私がちゆをできちうトシテアラ
まの約ドア「アサモ舊もん毛ぶらまきとをすりまづて更ば
の風俗と
アリドアアラモせん私モアホ赤ちの風景貞を
高てきて居るのふとんまー毛約アサ「アラモアモモ
本ざき毛毛の歎きハ子「史どて私モアスル毛
みりんでありまきアのをトア「困つて教をせアが隣りふ
居てあら今一組の客ふ對ひ「モレ ああもん毛卒^トモ

けとお兵あさのすあ「ヲツトケンのんくそ至をきみて
ミのトキうちももあ
見立ぐ宣ひあふ遠方へお神がまつてどる同不令よう
知をやア高砂へ参角さんあ六ヶ處の豆あい豆を出
きのが大丈まだらに客「全神呑めれ」うひあうお食と
放しませうと言ひあいが宣ひのふさづく受くうかの膳と
色く「のけ身いわへ旅人で私ひうをあづああをうし
どりのをト滋養をホット味き膳口の湯を足のめと唐衣
「ト一産グ残らを大笑ひとあひうちふ又外の

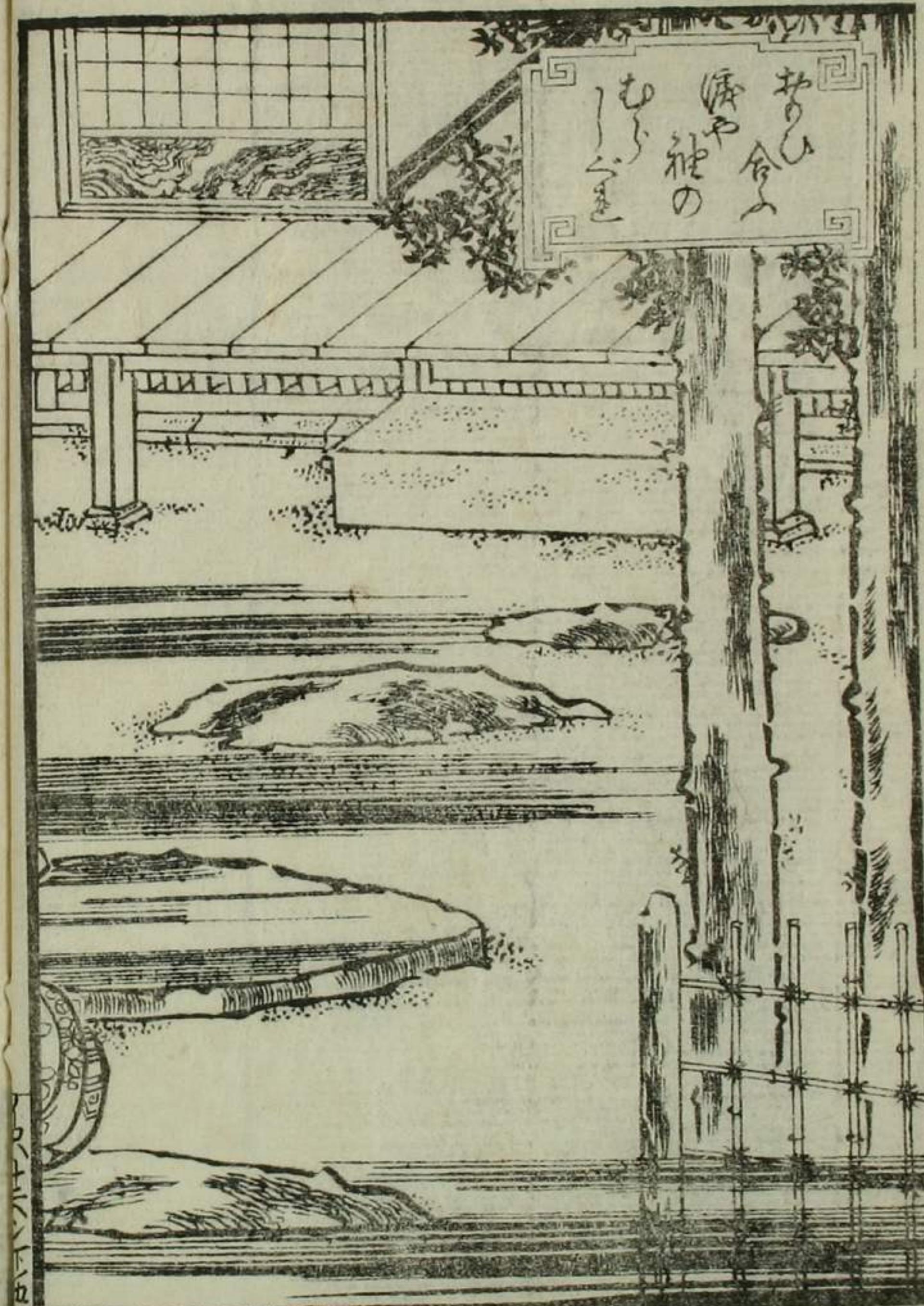
藝者あじゆあうてゆく、羅中が振うふうう客ひ大膳
振とあく一比茶屋の女ひ小籠の袖をちまひと引くもあ
小籠も支とく御てがふ船ふねく換うもとてわよき
所であひ舟を立てばかの茶屋女ひ波ひて来て「モレ
離えト言ひあう耳の側へ口を考せぬひもく解け
「小籠ひ差へぞ完ふと「ヲヤおうをあつまうく
どく庭教の於合が御招であつませう子エ「ヌアふて
アヌア松が春邊で房ううむううごどきひ身をう子勝り

物事お実みが入はれてお容よのとを忘なるまいぢうふお落お
ちいヨリ子こ他たの物ものの同そ本もと類るると面お仰あておくますヨ
一ま窓まど小こあり正ま深ふか切きハ死死ゆ高たかきよアサ余よ斗と
度たを言いういので遠とく教おをアシモトヨト脊せき申めさまと
放まく美うつく似しを生うまバ小こ難ひん病びやう小こ言い示しスまと
のの陽ひ子こを下おさて往ゆくま船ふね运お方ほうの鹿しか生うる
生う垣垣の小こ泣な小こ思おもびい和わ七しちい心こころを見み失うくまう
和わ七しちい心こころを見み失うくまう
何なごうゑゑ不ふ幸くわいくまつて来くままうまど羽は文ふみ教おんで

寒さこのさま新し報ほう新し食くをて候ま御ごと異ままま
ぬぬどど行おろ人ひとを待まつといまだだ、童わの様ようもぬぬと
獨どう食くをああて香かる所ところ、真まカ度た姿すがの櫻さくら御ご在ある
宿すひ小こ馬まび足あし小こ敵てきにききを相ありり小こ
聲こゑをこゑ一一和わ七しちえん定じくま事ことお異まるまへ密ひ待まをまお
立たざざとらうけ生まども何なか度た教おがが、そそれれアハタタ
來くて居まるま今まお清きよふ櫻さくら御ご、肉にく魂たまでで裏う
ろろと教おんだママ琴ことののけけききととももああ一一度ど教おがが外ほか、

ふくうアあるまくうとまを株で居こみて支ゆ
で
坐そあらまとのウソどう大き二階ゲ娘やうふせ
が所處のむ客ど一も吹きましむさみのゆ家ゆゑに
り一個、か面ち居どとつと支であつちをヨ支不支利
居のあ門表さんがあて居るであつちをい
居とも大町のドヤア姓うア「そひのいさんざわ
居るホア「ヲヤ支よア那お内表さんを知てお在
おちるのく、由ひがきまゐの子エ「ひ衣ミトヒ

さあてあのか肉表さんハ毫小寫ねどりふ評判のじ
あら由後表さんみどりひまじどもあがえん仰報の
くが生のドヤアきのく「モモ廉ア言とぬどあんまう
が仰報するのう「イエ行とも言ひ是うのヨ写と
老ハ毫小寫れありまうロあくうの宣ひ女がう
とをふをを脚と見えうがのりを發うできのうが
さんどタのうあとあるとか言ひの状がまらうドヤア
きのう「ナ三那女の度ぐま度ハおゆーの見姿ミトヒ



かあちゃんの所へ来らうといふ事もあつて
歳のつづきのふくや持い立ととらうて居るうちも
店舗の那騒動ちうべが、小屋の中ふたりがあま
と見ええんが同居ふすとお左みちのこう私と初うア
候ふあまのゆぢのむうをまきの縁うとも、ハアの争ひ
度のぞびづ私きめアもあまんの女房の家である
ゆゑを傳れぬあ酒ふきぎりとお客の前へ禮を会
せん居るやうあゆの便ふんが教りう教るまゝ精て

でも初どさうあわよやアありますんう私の本ドヤアもあ
まんや尾さんふ竹竿首尾よく本を「コレサ終」と
先を変を言つて萬一他ふ吹きるとさうせせ聴不耳がある
とより良をねくらすを付るまで「ホン二筋うちである
ちく子エヌでけどもお前さんふあんみ直を裏に見
るとまくら後立のヤツイ風邪由言んでありますアホ
る麻ア言ツカウどおれを深氣者とおづけ身より
あまえがそんみ高貴をさせちタアをうせんが「ホン二

筋うちふりてか異どと苦勞を爲てゆ里難文があは
じゆ鐵候ふゆ今のでうか変を言ひるとは情くう
生きヨ史ハ甚うと仰ぐる君ふ色とひ変づあるうゆ
出で異うと今うか清どんふ言つてすよう「どういひぞ別に
用でゆありますのう」「達」ゆくおれの教を又くう
えども「う」
秆の用を立ちあうたと仕事と教サト言ひあら
懷より手紙を一と先出で「實ハ先支がひ手紙を
おれがあのうと渡して爲て異う支とゆるが客

もあ黒びどと職よりヨ先が時てをきとまのまうどんに定
りらううむとものせとどもくんかふ隨とせんでちよ
教をすすのまへばくわきいあとのやうかあるとて居る
ホシニ果敢きひ直じアキハクチエ史をかりよとあし
義を勤ゆのが否ふきりまを、ヨト言ひへひくうあは
て男の教をあつて見つめる、永あう極女のう等ぐん惡病の
生るのゆき難いを、モう處が時世筋などとあまうやく
あまえをたまふをう中ふ由今秋の雇収の客人

「別て身をつけて勤むる事あるべからずせ
彼毛りようち余極公まぐとまく又食安の故食づ
惡いとゆけぬ遠く那方へ往くが空ひばれもあく
降る度とあやう」
ホシニ支由若くさどあくまき子エとま
トメア見えて私の方もあ返すを重ねと言つて差
え
てお思あきくヨモギゲニ、お前すんじどうをもくちどあ
まき子エも候あきくヨト言ひきづる者のもとう狹ふ様じ
あらうどま
ねを死ぬ
「こアヌア余うせどあくまけきども

僕あがきあもひ揚あきらめを縦たてもととけ傍そば小人こじんありて曰くひ揚あきらめ
さきをまうまちざまちよし
きあく乃のの時とき奉衣ぶぎ金榜きんばう全助ぜんすけと唱うたひ歌うた七しちづ清きよ

く小難の是處ありたりて歎を嘆き向か若
うあさりむり
うれしに讐言を報ひん更まみづわゆるも見え朱色
ト漢語にて然ふあるぞ矣さまよひとておの脇
うちを出る者ふあるぞ豈く人情ふ渡らざ
ハ千辛万苦を極めびりあくべ本末い遙が
うん故人情を知る者あくべ又は人情のあくべ
素より小難の本末と内納采をせらるあり
ばす入帰ふらるゝ中あくべ文選不義といふゆ

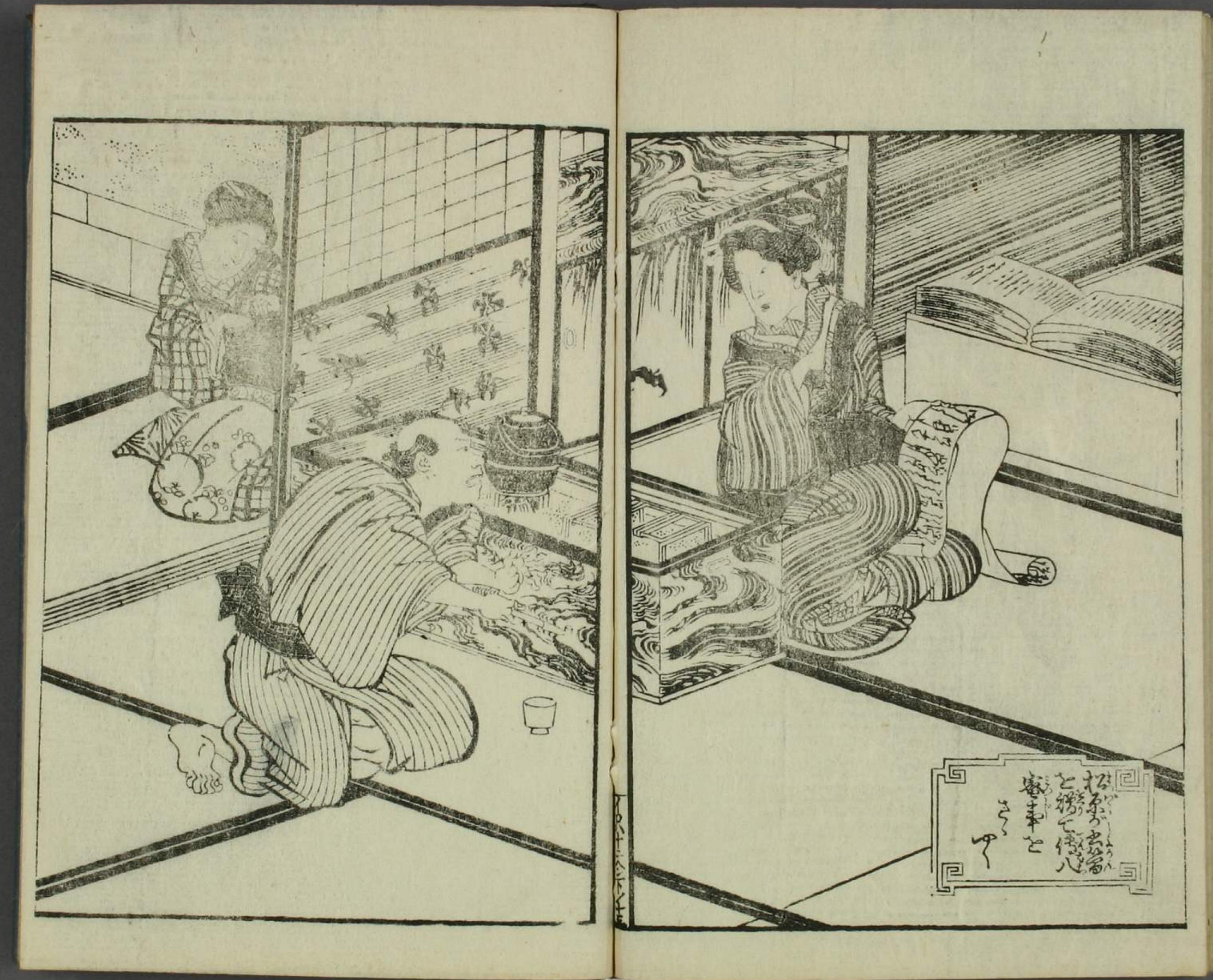
あまを互ひふらひありてはては假令患疾のあ
あうととあく 難きうるうんを先付入といふ
あへや れまく うー うじ きく
及びて老矣の余生ふあく必死の差情を究めし
度まの嘉傑といふべき下の腹を獲みて赤七
ふ難が苦矣を知りて○羨きむかひ入切るもせ
を とく らく せ
猶の意。古人の一句奇あるうあト一笑とぞを

第七十二回

弟も町をも利庵のお茶、柄杓、火鉢の例へ
て参考の方の様面を観て居る所へ次のもの跡あと
で八百石「ハ」内苑あさひの寺、僧八でござりますと
まことに空く方柱とアヤ火鉢の例へお出でござ
あくせく寺へある、「アキヒ」^信「方柱」でござ
ますと丈きよちが減り遠てあります、月夜で寝室
いそぐらざるをせり、「アイ」のふゆまつるるがまく、ヨガ
うんざりと世話の店へかへて子工^仕「モウ毎日

追掛けを爲るやうてどきのものを「右様でけ間
よアさうおゆか歩で多くとふつとが今月の又のとお
で出うきて來るの」「イ用が多のとば不沙汰を及
あて居うちくが今日の右様のお食事へありも」と
松永左仲さまう女へとまうしてお手紙をちて絶
筆せきとト言ひきぬ紙巻のあう一色のと筆と出
て渡せばお葉ハ被つて「あう度下」
おふふ別ふか傳言でゆあるやうふせてあるが猶も「
一

「左様でござれも一併先達との支がござりゆく
ら尔来へとまうきのりハ倘能名浪人シナノウジンハ伸延さみと警
と見て附ねつゝとひ聞くでゆのを以て表し
くあつたと見ゆもちどり出入の者まく見えのゆうであ
いゆい出入をかぎ止小きと極でござれもをせきと
私ハ基松永さま下仲る事公を久しく歴して居つて
氣のゆれ存続のうシナノウジンの前小店を出で居う
まうそので左仲さまの取扱ひでお出入の出来やう小



ありまことのどが恭うかへ伏拵でござるまきうち方仲
さみの肉かの更までお出でござへゆて実ひのまゆ
あらしと喧若浪人の支ふ然て先まで退くと方筋へ
夕若者を走はさましてこまくもを所がま浪人の中で一
をそぞ
波に乳搾りごとのよ大半を乗と助といわが承知の翁
小大さう立派ある事情をもて秀さんぞもて速きて、内
地を實せんどう金袋えんぞをもとめと施物、何で自
永く住むむるのをうなづく所でござふ又祇園

町や伏見の辻本町あるの賜枝折び不況をねうて
墨被油びつゝ小ちつて居るのを女房が見聞をあ
とのひのぞ後を立てふの二人めある女房を返却て自
かの乳入と搾女を受却て妻ふくとくのとくのとくの
ふいやハヤ海ふゆ津定小ゆ緑果と不羽詫あり招ふ
ぐふきく御言討の所がまくありふるまのとと方へ
きつてあり間者の前まう肉を切せてとうすまく
まア安ふとつすやうありゆまざくゆみの出来うる

まのうちを招へ幸ひ四つ赤小豆居る一すら世面中
度の招ふどううむけでもば無食へトツて居る邊を浪
人ふん对付て倘り不寛あ支でゆあのうち赤豆一小豆
せりやうふもうが官入をひき、差て有利處の肉糸小
肉く食であそび候もあらう那人と宣くわ候まで
支をもるびひ浪人せむひ方の在處を隔月附
を出であり支り大仲考へて承知して居やうう那
方ゆゆひをしのい居ちのけ生ど由来根きまでがえり

支を主外らきと居やうともら人あらうす處で客くも
含めて主くと、法るんをつけて倘一大事を突出、道を
をあく時ふに一度のひ廢夷も下さるの、うち等の宋ふぶ
かふとお作外らきちくが定めても女のも手紙小豆
スイ私の別へゆおふをか出べあつて、う支ハ蓋ゆ
ぬてあとくあまつて左るヨ侍、竹竿首尾よくアフケ
出であつて、口瘡夷ふあくつまくのあでどきのまよ
ウ安女ハ仰ぞ宣ひおん歎りでもござひまきも「私」

もどもぞとさん角くこ夏なつもきのダニ女めのの抱智いぢあつやうざ
けとども今いまお言い人の大星おほほしといへんひ人ひとが内うち小こせんせんを演えん
若わかがあらうう足あしも初はじきあらうお底そこお底そこ由ゆ大勢だいせい
かをてて陽ひ日附ひづけも出でくあらうでりとども私わたくしま
他ほかうよとまくと大星おほほしの招むかすを探さして見みるやうふと
と方ほうの人に易やすい人の所ところ肉にく衫はんでたつてあると夏なつのあに
又また旅食りょくしょく小こ來くわて居ゐる浪人ろうじん者しやく小こ差さしめとらん人ひとふと
このきひでゆきへうう行ゆきかても私わたくしが見み角くこあらうが

あつう連つれ小こああ不知しらせらううお前まへも人ひと材ざいくくゆゆでも
お車くるまあらう私わたくし不ふれ候まへをてか是これと然しからをままばばお立たつ
ひ小ちい四よ齋さい夷ゑが頂かぶきうと言いふわのぐくぐく傳伝「ま御毛ごもう
官くわんへが山さんでどざどざのままを仰あおきままの心こころ角くこ下さの
手てふ送おもて入る度たびを先さく考かへて樹きのく木き世よでどざどざ
ませう。イヤ支さ不ふもどどさううの左さ仲なかさみうう四よ傳伝
言ことのあつとのをちままて居ゐるやく昨さう晚ばん阿波あはみ長ながと
やうの二ふた階かいやお山さんのあつと小こ難ひがうのの娘むすめ女めのの夏なつハ

まち
待ちて帝を听说く遠方へもよろト立候まちと
のト言ふ小女を仰て身寄せ耳の側に口を寄せ
ゆゑとそく言付まび下り思ひ思ひト主つて往く
一ち客をあきら私ひ立つも情不致しませう三か
寝ぢらひいが子も筋白のそぎの體をむづふ引戻らる
まう迷惑をおあざらうから拂をふも拂りヨウカのゆ
あくひづき返く四ね候を爲生せう他へイ左括きの家
まくおがひましももトそくみて主拂ま

今遠のてあらかの和よせうか榮さかふ對面おもてうそを不及まく
て又またあるわ遠のりある开あハ十三編じゅうさんのちづりふ續つづく

政治ちじ小代ちよ基礎のりづき

立編たてより 烏永からな 春水はるみ著あつ

多おお年ねんう嗣つぐ編ひん引ひき譜しふ出で稿がほののお遠とおとおうそ出で稿がほ付ふ

あらわね聲こゑを求め因いん大だい流りゆうののと傳つた承うけど

